

第3回農業塾 大原先生の講義

1 生きていることの証とは？

生き物に共通するものは何か？

(受講生に聞いてみると)呼吸している、食べている、子孫を残す、死ぬ、動いている、など
農業は生命体を扱う産業であるが、いくら植物工場が良いと言ってもすべてをまかないきれない。
基本は土(自然)に依存した農業である。

2 生物共通の特徴

種の存続を図るために個体は子孫を残して死んでいく。

生物は体内に化学工場を持っている。食物から必要なものを取り出し、いらなくなったものは出す。

水は必要であるが、必要以上にあると根が腐敗したりして死んでしまうこともある。

iPS 細胞は、その技術の一部に難しい問題をはらんでいる。細胞がダメになれば、ダメになるのが生物であるが、その細胞の再生ができるということになれば高度医療と同様に生命倫理に係わることも生じてくるかもしれない。

3 ほかの生物と人間との違いは？

「言葉」によるコミュニケーションが成り立つのが人間である。

コミュニケーションだけであれば、動物もコミュニケーション手段を持っている。

ライオンが集団で狩りをする行動、渡り鳥が隊を作って飛行する行動は「暗黙知」というか暗黙のコミュニケーションが成立していて初めて可能なのではないか。

すべて生物は言葉の前にベースになるものがあり、体の動きや共通体験を通じて共同行動を可能にしている。

人間にとっても言葉で思いや考えをすべて言うことは難しく、ベースとなるものは生物共通である。

4 人間の生物としての行動と特徴

人間の生物としての特徴には、「言葉を話す」home loguens (言語人)、「道具を作ること」home faber (工作人)、「遊びは文化の始まり」(ホイジンガーの著作名) home ludens (遊戯人)、home economicas (経済人)などが知られている。

人間は遊んでいる中で知恵が働き、工夫が生まれる。ガチガチに働かすと人間は物を考えなくなる。

遊びは余裕であり、遊びがあってスムーズに物事が運ぶ。自動車でも遊びが適度にあって運転しやすいのである。

遊びがなく働かすと工夫が出てこなくなり、工夫がないと農業は楽しいものではない。

(ホモサピエンスとしてのヒトの特徴を理解しながら如何に自然と関わるか)